



TITLE:

<大會抄録>東部アフガニスタンにおけるハラジュの王國

AUTHOR(S):

稲葉, 穰

CITATION:

稲葉, 穰. <大會抄録>東部アフガニスタンにおけるハラジュの王國. 東洋史研究 2003, 62(3): 505-506

ISSUE DATE:

2003-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155526>

RIGHT:

その建物からは香爐などの祭器、即位式に関連するとみられる犠牲獣骨が出土し、祭祀場だったとみられる。その構造は正方形のプランを持つテントで、二〇世紀中頃まで残存していた「成吉思汗陵」のプロトタイプに類似した構造であった。報告者はその建物を、チンギス・ハーン廟の最初の姿であると理解している。

本報告ではチンギス・ハーン廟の初源形態を實證的に提示し、そこでの祭祀活動の實態に迫りたい。また、その建物は出土遺物から一五世紀中葉まで存続したことがわかつている。そこで、不明な點の多いポスト・モンゴル時代の漠北についても言及したい。

シーア派聖地アタバート參詣をめぐる諸問題

守 川 知 子

一九世紀のイランでは、隣國オスマン朝領イラクに位置するシーア派聖地アタバートへの參詣が盛んであり、年間數萬人にもほるイラン人がアタバートへと向かつていた。「アタバート」とは、ナジャフ、カルバラ、カーズイマイン、サーマツラーの四箇所にある六名のシーア派イマーム埋葬地の總稱である。一六世紀に成立したサファヴィー朝期以降のシーア派教徒の増加とともに、イラン社會においては、これらのシーア派聖地への參詣もまた、メッカ巡禮に次ぐ重要性を持つようになっていく。

イラクの四箇所の聖地を巡るイラン人シーア派教徒のアタバート參詣の實態は、一九世紀に數多く執筆されたイラン人自身によ

る旅行記から明らかにし得るが、この種の史料からは、イラン人がアタバートを參詣する際の様々な問題點もまた、浮かび上がってくる。イラン人參詣者に關する問題の多くは、これらのシーア派聖地がスンナ派のオスマン朝領内にあることに起因しており、オスマン朝側との摩擦や軋轢、あるいは兩者の認識の差異という形で生じている。

本報告では、一九世紀のアタバート參詣の實態を踏まえた上で、ガージャール朝政府とオスマン朝政府との間で締結された二度のエルズルム條約や、兩國家間の參詣者問題を扱った外交文書を通じて、當時のアタバート參詣の諸問題を検討し、イラン人にとつてのアタバート參詣の意義を明らかにすることを目的とする。

東部アフガニスタンにおけるハラジュの王國

稻 葉 穰

七世紀、現在のアフガニスタン東部、カーブルとザープリスターンの地に成立したテュルク系の二つの王國については、從來それらがどのような集團に起源を持つのが不明であった。しかしながら一九九〇年代に入ってアフガニスタン北部から大量のバクトリア語文書が発見されたことをきっかけに、アフガニスタン古代史に新たな光があたりつつあるなか、このテュルクの起源の問題にも大きな手がかりが與えられた。すなわちそれらの文書によって、一〇世紀、アフガニスタン南東部にいたことが知られて

いたテュルク系部族であるハラジュが、七・八世紀、ヒンドウ・クシユ山脈の北麓に居住していたことが明らかになったのである。本發表では『新唐書』謝颺國傳の「謝颺居吐火羅西南、本曰漕矩吒、或曰漕矩、顯慶時謂訶達羅支、武后改今號」という文章を手がかりに、そこに見える「訶達羅支」と、いわゆる *Nesak Shāh* 貨幣に見える銘 *Nesak* とをハラジュに同定することによって、これらの王國の起源を同部族に求め、併せてこの兩王國成立の経緯をあらためて検討する。

都市とワクフの諸關係

二 浦 徹

九〇年代の都市研究が、畫一的な「イスラム都市論」の解體であるとするれば、近年は個別都市の研究を踏まえたうえで、總合化をめざす動きがみられる。本發表では、イスラム世界の都市空間の形成・發展・衰退といった歴史的變化の原理を、エジプトとシリアの都市を例に議論し、變化を軸に示えることによって、固定的な都市定義にかわるモデルの提示を試みる。

中近世のイスラム都市は、物理的空間としては目的や規模の異なる多様な施設の混在・密集によって特徴づけられるが、基本單位は、方形のブロックであり、その自在な結合によって發展した。宗教施設と維持運営の財源としての經濟施設とを結びつけるワクフ制度は、都市と農村、軍人の支配層とウラマーと市民を連結し、

都市發展の原動力となった。都市の宗教施設や經濟施設の建設數を分析すると、特定の都市や時代への集中が見られ、ワクフという投資を集めうるかどうかは都市の消長に影響していた。

ワクフを利用の平面でみれば、個々人による細分化された利用に依據していた。ワクフが増えるとともに、他方でその收益をめぐる争いが起こり、管理者や吏員によるワクフの私物化によって、施設や都市が荒廢する。都市とワクフの關係を、建設・寄進、運営・利用、衰退の三つの側面から検討し、むすびとして、オスマン統治初期のダマスカスのワクフ調査臺帳から、ワクフをめぐる物と人々のネットワークを再構成する。

歸納と類推

——中國的思考様式を探る——

武 田 時 昌

中國では、注釋學が古くから盛んだったこともあって、具體的な事物からの歸納に力點が置かれ、演繹的な議論を展開することは稀であった。中國科學史文獻においても、代表的な理論書とされる『九章算術』劉徽注や『黃帝內經』においてすら、演繹的な論證はほとんどなされていない。そのために、中國科學の理論的枠組みを構造的に把握するうえで大きな障害になっていることは確かである。それを克服するためには、歸納の方法論における思考様式を明らかにし、その特色を探る必要があるだろう。